

遊行二十四祖御修行記(中)

河野憲善

永正十八年辛巳四月三日、一蓮寺御立のとき路頭にての御移りの在所あまりと云所也。

ゆくすゑにいく程あらん六十には二あまりの坂もこえきぬわか頼む仏の為に寺立て、数多ともなひ安く住はや

行くも南無阿弥陀仏となふれば末ちかくなる極楽の道

又或とき

終に我れいつくの土にまたれてか所きためず迷行らん

四月十日 十三代上人百年忌之追膳に塔婆

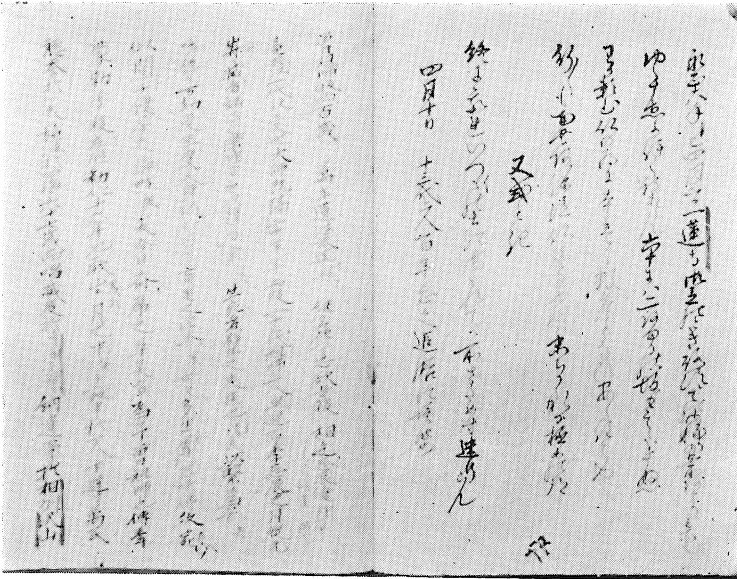
曾祖師飯西百歳 萬年遺法未還遯 繼名名伝徳欲吾報 相二近忌

辰一優鉢華

一八音誤進也連也(後キチナイカ)

興以一代教主尺迦大師既隔三二千年霞。一十三代祖師上人早迎三百年忌辰之月。從元寂滅者諸法之常理。聖衆以肆為樂矣。生死者群生之定途也。凡夫以繫為苦矣。嗟億々万劫受。回受人身猶如值三千盲龜之浮木一矣。世々多生聞下。巨听仏教上。宛似闍干優華之海畔一矣。爰今日齋席之尊靈者為予曾祖師也。伝聞蒙勅号。後在位勸化十六年也。厥歲月之中矣。上肇於一人下導三萬民。聽善於一天。施法於四海。六十七歳而唱滅度於清浄光寺。納遺骨於相州沓山一矣。儻相遇此期頭之命日。允希有之宿因也。弟子統三十二世之高跡。苟為

遊行二十四祖御修行記(中) (河野)



遊行二十四祖御修行記(中) (河野)

門徒於管領ト矣。恩山高フシテ兮タルコト崔嵬秀レ自ニ五岳之巔一。徳水深シテ兮タルコト渺茫勝自ニ四瀆之底一矣。彼玄繡大夫之飯レ浪也表ニ報恩之亮一。黄衣童子含レ花也抽レ謝徳之志一。然間雖レ勅正ニ孝行之道儀為ニ踰躡一旅邸レ故其宮云糜也。因以剛ニ小梵公一。題ニ拙偈頌一。誓ニ以ニ小量一如レ当ニ三大器一耳。顛何日未レ詣得レ生淨土ニ何時未レ拜奉レ見レ尊容一矣。乃至大千小千之世界ニ霑ニ平等一一味之雨ニ五道六道之衆生誇ニ撰取不捨之風一而已。

五月五日、諏訪法樂三首の御詠歌

菖蒲

雨ならぬ軒の玉みつけふはなを菖蒲に伝ふすはの御社

夏月

さゆる程すゝしき影をみつうみや氷を渡る夏のよの月

祝言

千いろいろある竹は物かは万代もねいりの杉のふりき誓を

同会当座の御哥三首

都霞

おほ空は霞初けり久かたの月のみやこも春や立らん

寄屋恋

かの両社牽牛織女とかや

契りをや二の星に祈らん世々にかはらぬ中とおもへは

観無常

身のはてのけふりに消ん夕をもいつれの日ぞと神もしらせよ

十七日、二首の懐紙常任庵にて興行申さる。短夜月

心引かたや有らむ梓弓入空はやき夏のよの月

暁別恋

わくらははにとひくる人のね一屋うしみつ過ておき行そうき

思往事

見しはみななきよの人と忍ふにも昔をかへすね覚なりけり
廿五日、ゆくかけをみつうみ涼し今朝の月
廿八日、諏方刑部大夫亭にて、若竹に老せぬ友や庭の松
六月三日、下宮にて神法樂に三首懐紙 水辺納涼
織女もきぬや重ん天の河近きわたりに夏を忘れて
契経年想

天となり地とわかつてる初めよりむすふ契りの末もうらめし

社頭注連

みつかきや久敷代より御注連繩かけし頼みは神も忘れし

同前杜宇

当座

陰高き一木の杉に杜宇あひやとりする夜半の月哉

寄衣想

此名所下宮近きわたりにあり。

千はやふる神のみけしかたちぬはぬ衣かさきの苔のみとりは

月次会一首題之 松為久友

花もみちをのかさまくちり行に千代のみとりそ心かへせぬ

三首の懐紙 かすみ

をちこちにみやはとかめむ浅間山立やけふりもふかく霞て

あさころも

栖なき旅の身なれば麻衣きつくなれぬは人おしそおもふ

いなつま

をきわふる露のこの身はいなつまの光りのうちにきえねとぞ思ふ

七夕

七夕にかすてふ袖はよしあしも天津衣とけふはなるらん

十日 草花露 諏方信州の亭にて二首の懐紙

家の風おさまる時や秋萩もならさぬ枝に置く白露

名所山

もろこしの雲の夢迄富士のねの煙におもふ朝ほらけ哉

初秋 当座

秋を世に誰しさらさむ風の音もさやかに目には三かのよの月

寄車想 当座

小車のわかれてのちにみすもあらずみもせん人を思はんもうし

草庵

きえぬまのわか身の露のをき所いつくの草の庵りなるらん

一二寮其阿信州歌方光明寺下向之詩並序

永正初旃蒙赤奮若之春住三筑州称名精舎一兮至三強固赤奮若一兮。一

十三歳隣蹉矣。既遂二功名二畢頃年吾会下為三第一座一矣。然今俄而遷三届

信州光明寺一。因以三勸化群集之寸陰二染三秃筆二述三情諸二耳。

堪三羨先レ吾隱遁心 従レ今客去事二閑吟一 仲秋十六前宵月 名遂功成

山又深

辛巳仲商 日

光明寺和韵

予從二十年前之昔辱奉レ受ニ 高情一欲レ述無レ言。然頃不レ料就ニ 勅言一

赴ニ信州歌方之辺一。傍鳴呼於御辺欲レ尽レ命又不レ能レ得レ是焉。如何々

々。仍忝賜ニ唐律一絶ニ金声玉韵擲レ地瑯々者也。雖ニ世之七珍ニ奉代此

一高義也。寔以ニ瓦礫ニ雖レ侶ニ双明珠二作ニ詩一以奉レ答 尊押焉可レ免ニ

鷗鷺之咲一也。

高竈多幸

未レ聞比類厚慈心 幾度拜看清詠吟 二十年來賜ニ高惠一 現当都是大恩深

遊行二十四祖御修行記(中) (河野)

永正竜集十八仲秋中之十六日 其阿九拜

或ときよみ給ふ御哥

其心えかたき法の末の世はた、一すちに御名を唱へよ

たのめみた弘誓の船に棹さして生死の海を来り迎ん

廿八日、従上原歌方刑部太夫永々御逗留の内御礼として被參時一会に

是は高遠と云所にての御事也

とふ人のこころや干ししほ初もみち

大永元辛巳九月下旬、甲斐国より亦復就大乱太守信虎後生一大事可奉

願之由依懇望一条へ再住有。抑国郡半過放火然。一蓮寺中寺外無相違

扶持給て剩駿河敗軍以後死者をば導師をなし、存者をは三千余人囚と

なりしを智略をめぐらし給て、一人として無恙帰国なしき。

其ときの(塔) 婆銘云。

駿甲西州弓矢巷 命乎敗北刹那中 耐レ憐共是忠功士 廻ニ向称名一皈ニ

死空一

度以、今月廿三日西刻、一陣一戦之士卒早破ニ却於修羅鬪諍之鉄門ニ速

欲レ乘ニ於冤親和合之金台一者也。沢山大衆入ニ戦国ニ誦経念仏凝ニ懇念一

焉。浄土大経曰、釈梵祈勸請転法輪乃至扣法鼓吹法螺執法劍建法幢震

法雷曜法電謝法雨演法施矣。又云、其仏本願力聞名欲往生皆悉到彼国

自致不退転文。抑傍人須レ訝ニ我咨 嗟一。今既堪レ斯言。允 鑿 皆違非ニ

自戦之確執ニ依ニ主命一抽ニ匹夫志ニ輕ニ命重ニ義耳。於ニ茲余出ニ千陵阜一

萃ニ人々之死骸於一墳ニ会ニ各々之亡魂於九品矣。顛ニ奄ニ飄ニ我慢之幡ニ

転兮成ニ法幢 即摧ニ邪見之刃ニ変兮作ニ法力一矣。仍卦ニ立高頭一令レ緯ニ抽

偈一焉。然者諸靈嘯ニ苦空無我之風ニ遊ニ寂靜無漏之月一矣。亦復家園樂ニ

弓矢一匱ニ刀劍一。永得ニ息災安穩ニ砂界拔苦与楽而已。
年月日法施大衆敬

(コノ一段タカシ)

一爰駿州叟順石蔵主千時在彼彼偈伝聞。翌年孟春和而以見寄ニ一通云
甲之一蓮寺者弥陀之古精舎也。永正辛巳秋以降 藤沢 上人居ニ住於此

山。千時駿人争ニ其封内ニ騷屑日尚矣。由是刺史左京兆幕下英雄鍊ニ
蕭何韓信之兵術ニ包ニ公望孔明之智謀。或山而張ニ軍或野而堅ニ壘。干茲

前月廿有三日拂鋒及於精舎之側竟駿陽福島氏之一族重ニ義輕ニ命戰死。
吓天平命乎。上人嗟嘆之余不忍見之命ニ大衆ニ而葬ニ人々之骸骨ニ念

仏誦経晨香夕火。加之彫ニ刻高頭一基製ニ作伽陀一篇讚嘆称揚。夫正
念弓明達箭忽排ニ修羅之鎖窓。精進鎧誓願甲頓踞ニ安養之蓮台ニ矣。夷其

法施大矣哉。某之雖ニ浮屠之徒。嘗嶮攀祖風喚而臥駢兵馬之後。天下喪
乱仏宇僧廬皆入戦国之謂乎。矧是福島氏者吾禮越也。言哀慟則山岳竭

海波乾者也。上人予雖未奉半面之雅讓奉 座 尊韵充瀝藻之贊云。
忠臣重義古来少 万事人間彈指中 此去蓮台ニ元不遠 一輪明月照ニ

寒空ニ

野釈順石九頓首呈上

上人又和之給。序略。

青油幕下三千士 黄石公還居厥中 此去蓮世皈国日 兩年辛苦又成レ

空

大永二壬午正月元旦試筆。

相遇清明ニ对ニ士峯ニ 風光渺々水溶々 東君今日万家客 坐上梅花
門下松

同朔日、 立春之心を

ともなひし心も空に白雲のけふ立春にとしもこえつゝ

同日述懐の心を

くり返し春にもあへる我齡かきりよいつと賤のをたまき

過し歳暮に

六十あまり二のとしもくれは鳥あやしやなに、残る玉の緒

同佳例の法事の心を

万人よろつ年のくれ迄もかくや唱ん此法のこゑ

二日佳例の会に

な引あひぬ富士や甲斐か根春かすみ 右の発句はふかとし

駿河衆と甲斐の一戦以後城へ落集る三千余人無事に帰国の調法をめぐ
らす事なりし故一和の心をきねんなり。

廿五日御会有、近江国小野大光寺奔走を申さる。此懐紙京都にて宗碩
などにみすへしと被申、然間帰路の心を、

鶯や梅より花のみやことり

脇大光寺其阿 月もわすれし明ほのゝそら 其阿

八日、過し正月廿八日一条出行のあした□□りてのこりとまりし
輩のことを心に恨やしたまひけんつらね侍る御哥、

しら露のなきかけかけをく下草のもえ出る春になとか枯ぬる
これ源氏に白露の帖をきけることのはやほのゝみえし夕顔の花と侍

るを思はへてよみ給ふと、

山のはに入かた近き月かけをまちかねにもなかくるうき雲

法の車引やふりにし人心うしともえやは神もみきらん

誓ふ人そのかねことをやふるなりわかあやまりも有や御仏

或時の会に 月をくり梅も袖引句哉

十百韻第一の発句 二月十六日 千里まで月日やしるへ帰る雁(原)

或人聖廟の御影開眼の法楽に 眉こもり開く柳の心かな

信州諏方光明寺見一絶其和韵云 予辛巳暮秋再来干甲陽翌年孟春又欲(和、和歌)

返転於信州既赴驛路矣。時我徒上原光明寺主訪来見寄佳作因以香厥韵云、

当时歴代聖賢君 勸化自由如変雲 我統嘉名愁老拙 仰弥高矣戒香薫

旅宿見花と云事を 長泉寺にて三月十一日

雨ならて立よるかけのあひやとり花も一木のえにし忘るな

心をもとめぬ道こそ恨なれ

大かたになと文をまなひし

あたし霞のたくひいつ迄

随し野の煙のをくれ居て

風のをとをかへの松にこたへして

かねも尾上のあかつきのあき

大永二被書(カ)

世の外の鳥のこゑかなほととぎす

木すゑにも水のみとりの若葉哉

おけ高き梢はなるく月さえて

霜夜にひとりからすなくこゑ

あけほのくいろや霞にあまるらん

けふりも春のしほかまの浦

引袖の手にもたまらぬ面かけに

遊行二十四祖御修行記(中) (河野)

駒にまかするわかれちはうし

まちえては尚も珍し雁の声

秋にはあへすうつらなくさと

柳さくらを雲なかくしそ

霞めともけちめはしるき夜半の月

此頃はそれさへたゆる筆の跡

ふりては石もこけのしたなり

うちなかむるも海そはるけき

よるへをも身をうらなみに定めはや

おもかけはかり残る手枕

月ひとり見えて昨日の花もなし

都をは霞のうちに立別れ

ちきりや鷹の秋きりのうへ

身にいさゝかもなにを頼ん

弥陀の名を唱ふるのみをつとめて

結ふもきよき家くの水

山里は岩根くの道ほそみ

月のみやあはれともみん我すかた

露ときえなんその草のはら

舎り頼んかたも忘れす(カ)

鶯はいつれの節をおもふらん

待えても恨みはのこる中にして

又時雨来る月の夕くれ

花もゑみをふくむ門出の朝哉

遊行二十四祖御修行記(中) (河野)

柳はまゆをひらくはるかせ

あやにくの道を鶯ぞなく

秋にきて春になとかは帰る雁(雁)

身の行末をおもふあかつき

見し花のあまたの春に夢さめて

梅かくさそふあさなあさかせ

鶯のあかつき迄は鳴もせて

身をあくからす霞の夕くれ

きえぬ間の雲の迎を待ちわひて

月やしるらし旅の夕くれ

むしのねをきくにもおもふこけの下

さそふか春の入相の鐘

つりふねの霞にかへるうちみへて

なげくはかりの垂乳根の跡

霄くはつとめて結ふあかつき

ひとりの庵誰にとはれん

花こそは春にわすれぬ友ならめ

こゝろそなたの夕明ほの

月にとひ月わかれし秋とをし

朝顔(朝顔)をうらやむ花の朝なく

松のちとせもうき身にはよし

つきぬなかめや春のつれく

よむ哥は雲や霞を種として

つゆに露をく庭のすゝしさ

一とほり過て又ふる夕たちに(マ、は後筆)

へたてぬる心と知もいひよりも

門をしさすにやとりかるくれ

去年の嵐の残る谷の戸

ちる木の葉しける頃迄くちもせて

見ぬもろこしの秋をしらはや

玉章をいかにつたへし天津雁

そふうちも物うたかひは有つへし

花には松もかせをわすれよ

いつよりとけて心やすめむ

うた原のくるしき思ひむすほふれ

おもふみちにはあく事もなし

聞もうし夢になせとのそのちきり

うへたてし花のみ咲る浅茅はら

霞やまかき春のふるさと

こけの袂も月やゝとらん

星にこそかすほともなき衣なれ

たちてむなしき名とやならまし

(マ、お後筆)

をとほ山音つれてなけ杜宇

入日のかゝる松の一むら

寺とふみきかぬかねきく此夕

かりそめにとや結ふ草の戸

心もてみよ朝顔(原貞)の花のつゆ

立やすらへる道のへの春

鶯の月に袖引此あした

引結ふ庵りは竹を柱にて

岩に滝おち山ふかきには

われそおもへはわれもつれなき

なひかぬをしるてはなとか忍ぶらん

有明までの月のよなく

浅茅生にひとりうれふるきりくす

をよふにこそはうらみてもみめ

雲にふく風をは花にいとほめや

さてもたれ心はとめん山のかけ

ましはる友も都なりけり

露かはるなき人のかたらひ

朝顔(原貞)の齡の外にかみん

いまはの時ををそしとそまつ

入相(方原人)の鐘にちきりし人やこん

くるしく物をおもふ身よなぞ

すむ月にむねのうちをもはらはせて

人の旅行せしに発句

ゆく人に道有霜のあした哉

あさきよめする庭の真砂地

咲比はとふりと花に人まちて

うきにもたへてをくるさまく

露に霜風野分立秋のくれ

おもかけはこぬをもさそふ小夜枕

夢よりわれそいやはかななる

とはやな山のならひの秋の空

鹿は音になき木葉ちるころ

かりの舎りと頼む草の戸

花にこゝろあるしはみるをいとほめや

柳あらはに打煙るなり

水広き入江のむかひ雪はれて

こかれ行心の末のいかならん

夜ふかき月からす鳴こゑ

月やしる我あさはかの思草

植置てみるやとのあさかほ

山もおもひのちりやつもれる

朝夕にけふりのほるふしのたけ

おもふ事祈かひあれはつせ山

とをさへしるもろこしの人

ちる迄もあかね桜のかけふみて

月は霞に明(ついで)あけのころ

夢打さます春かせ音

おとろきぬ昨日を去年のとしこえて

きけはさひしき棹鹿の声

秋も只心つけすは秋ならし

昔とはや住吉のまつ

遊行二十四祖御修行記(中) (河野)

高砂の尾上の桜幾世経ぬ

かたふく月のとふき川なみ

あしろ木に朝きり白き宇治の里

真柴おりたく雪の山きは

浪あくる水も跡よりこほる日に

つれなきも思ひ捨すや歎くらん

よはひのすゑも学ふことのは

よそにいつまであらましの山

さらしなや月の秋にし尋はや

うきわすれす秋はきにけり

のこる身になき玉まつる草のはら

又こえん事もたのます年たけて

なかめしや夢さ夜の中山

すてぬはいかに人の世の中

おしむにもえやはまかせぬつ井の道

をちかた人になりて行袖

白雲を花よりおくの山にみて

ゆくももとり(カ)の秋そ悲しき

事とふも又ゆかりなき草のはら

はるくくと霞にとを山(カ)こえて

三月今はの明あけの月

思ひしよりも身社やすけれ

法の為捨る命はおしまめや

さりとも心のうらよいつならん

来りむかふる夕をそまつ

身のはてし憂世(カ)のなんきとりわひて

きえまつわれにおもひのこるな

ひとりむかふを月も哀れめ

まれなから星はあふ夜もあるものを

岩木をともとなせる山かけ

咲ちるや花もものいふ春ならん

露しくれのみ囁な山さと

萩にふく風をみやこは嵐にて

桜にみはや峰のしら雲

のこりつゝ月ほの霞む朝ほらけ

来る秋の月跡敷こすの戸に

草は花咲むしは音になく

やよほとゝきすもらせ初声

花はちり春はかへるにあこかれて

なをさりに思ひなれしや人心

二たひとみはうきかたき世そ

きくもうしよその別の鐘の声

いまはのくれにおくる鳥(カ)へ野

はかなき栖たのむあはれさ

いつ迄か命は我にのこらまし

心はこゝをたのみてそ行

白雲のさらぬ高嶺や花ならし

さのみ人誠なくてはをくるなよ

思ふへきこそこの世にあれ

けしきはかりの横雲の山

もよほしてふりもとふちぬはつ雪に

雪のあしたにしく物はなし

月のこり雁なく塩干出てみよ

さはりもなくやおもふ通路

人はこぬ花に驚なきかへり

をくも袂は常ならぬ露

靡(カ)きぬる秋の末野をすり衣

老か身は時のうつるも頼れず

いまはのきはに心ゆるすな

かりにたに人にとはれぬ山のかけ

身をすてはつる心ふるさよ

うくのいつくを雁かへるらん

月は海なかめそへはやあま小船

秋のならひは露もかはらす

夕かけを待ぬ朝顔猶やみん

霞にこもる明かたのそら

鐘の声ものこれる月もおほろにて

梅の雨に驚さそへほととぎす

梶(オホシ)さく庭は雲井のやとり哉

とをき世の種や盧橘園(ロキツ)の竹

遊行二十四祖御修行記(中) (河野)

見ぬいけに心まつすむ蓮かな

本奥書に 一海上人之御筆にて

按此書元來必定上下二冊と相知たり。然ゆへは宗門中古の僧侶の聞書の中に、大永二年三月又者同四年の御法語等記し相見ゆればなり。後人尋求之以全部せしめよ。

廿四代上人御入寂は大永六年五月十七日也。然是同式年三月中旬より御入寂迄の事は下巻にありとしられたり。惜哉。

干時文政四巳十二月十四日写之畢。時衆智阿惠覚書。

右此書以藤山宝庫中廿五祖之真筆写之。雖不知筆者初夜已後□□と
の廿五祖の記文有、御自筆也。後学知之。

文政甲申冬十二月廿三日以智阿陀仏本書写且一校了 美成(カ)

編者後跋

河野憲善

遊行二十四祖御修行記をここに上梓しおわる。首題に遊行と私に冠したのであり、この原文にはない。巻尾に一海上人の奥書がある。それによれば、ここに公にした本論は上に当り、まだ下がなければならぬと推定される。後人よ下を尋求せよとある。大永二年(一二五二)三月以降の文書が他に散見することがあるから必ずや下巻があったに違いないという。これも推定の段階を出でない。この度の出刊に当り、都合で上を上と中に別けて、中で摺筆したのもその理由による。



一海上人は遊行五十二代、もと水戸神応寺七代、甲府一蓮寺三十七代弁点。出自は武蔵本田真下氏。宝暦七年遊行相続。同十一年藤沢独住、明和三年入寂。遊行登位直前一年の藤沢独住があり、遊行賦算をばさんで藤沢に在山されている。

一海上人の次の代が五十三代尊如上人、この方は一海上人に続いて

宗典の刊行に意を注がれ、宗典目録を書かれている。その中にこの書がない。九十九の高令をもって示寂された藤沢三十代吞快上人を中において遊行空位三年があるので両者の間に個人的交渉も乏しかったとも考えられる。今は水戸彰考館に蔵されているが、文政四年智阿が写本した時には、藤沢道場の宝庫に、仏天不去上人真蹟原本があったのであり、文政七年にはこの度上梓の原本も筆写されている。文政四年の記事に意の汲みかねる所があるが、この刊行の上だけは仏天上人真筆の確信があるが、中は確信がないということらしい。

難解の字、不明の字多々あり、完璧を期しながらも苦辛したものの力及ばず、或は過誤なきを保しがたい。なお文字の訂正、二字並記、送仮名、返点、振仮名等後筆のものとわかるものもあるが、転写を重ねているので、後筆が、どの原本より後なのかわからない。文政七年以後の加筆がありとすれば、人々の眼福から消亡したのもそう古いことではない。しかし明治年代以後はたえてその姿はなく、今日なお稀覯の書と断じてさしつかえない。

(教育学部倫理社会研究室)